

# 哀歎抄（十六）

尾崎 文英<sup>ぶんえい</sup>

大雪につひになりたりひねもすに松竹撓む灰色のそら  
道ならぬ恋をとげつつ世を生きるかなしみふかくまことをつくす  
天も地もよみがへりくるときとなる地球の蓮どろのなかより  
臥処より汝は見つらむか白萩のさやさやと風ま青な空に  
滝なせる湯の瀬の川のひとところ青鷺立ちて川下を見る

山川はいつも招くとまぶしみて桑都通ひしころを思ふも  
和服にて藤村詩抄朗読（よみ）朗読<sup>よみ</sup>すすむ大谷静枝先生甦りくる  
雨の日は徒歩で通ひて裏町に鶏括る店も覗きぬ  
海やまに涼涼と風すぎてゆくこころの在り処青春の夏  
桐の花いまも残れり谷かぜに面影のひと言葉ぞとどく  
白蓮に法説きし寺思へりき天蓋にある柳原の銘  
大雪も酷暑の夏も台風も大地を過ぎぬ蓼の花咲く

（『日本短歌協会会員』）

